

放射線科この一年

医療技術部次長(兼)放射線科技師長 堀 勇 二

十年一昔と言われるが、現在の病院移って十一年を数えている。放射線機器も時代の流れに遅れをとらぬよう、また画像診断の進歩に呼応すべく暫時更新を図ってきた。ただ装置の価格が非常に高額のもあり病院年度予算の状況を見ながら、平成12年度よりCT装置、MRI装置の更新を図ってきた。そして今年度血管撮影装置を更新することができたが、どれをとっても放射線科の装置としては重要な役割を持っており、道北の救急医療を担う地方センター病院としての役割を果たすうえで絶対に欠かすことのできない装置ばかりである。また最近乳ガン検診によるエックス線撮影の重要性がマスコミ等で話題となってきているが、今回乳房撮影装置も二十三年振り更新の事が出来た。その他の機器も十年前後を目途に計画を立てながら進めているが、装置の急遽のトラブルも含めて概ね計画通り実行出来ている。

この十年余りを思い返して見ると医療機器とりわけ放射線機器の進歩はめざましいものがある。まさにコンピューターの進歩がそのまま反映され、装置の良し悪しに直結してきている。一方画像の保管、管理、検索の面においても同様に、IT技術の発展に伴って医療情報の標準規格としてのDICOMが急速に普及されてきた。この事により、モニター診断が可能となるPACS化(画像保管通信システム)する施設も多く見られるようになってきた。当院においても、近い将来を見据えて検討する時期にきていると思われる。

1)放射線科の動向、および業務

全検査件数は前年度(14年度)に比して、11月現在では殆どが増加傾向を示している。特にCT検査では10.5%の増加、MRI検査では48.6%の増加である。その他透視撮影、一般撮影では0.5%の微増ではあるが、トータルとしては5.1%の増加・2319件増えている。収入面においても診療行為別報酬表による10月現在では、8.65%・2316万円の増収となっている。ただ11月はアンギオ装置の更新があった為に、約一ヶ月検査がほとんど無くマイナスとなっている事が予想される。

人の異動に関しては、助手さんが1名出産退職の為に入れ替わっているが、技師は10名と13名体制で平成12年度以降変わっていない。しかし業務量としては件数で12年度比8.5%・5540件の増加となっている。CT、MRI検査の伸びが大きく占めているが、初期導入時の

CT、MRI装置とは世代が異なり、検査できる人数も大幅に増え、画像処理も複雑かつ多様化されて、処理時間も大幅にかかるようになってきた。今まではそれぞれ1名配置で対応してきたが、現在CT・2名、MRI・2名を配置して検査を進めている為火曜日、木曜日の人間ドック、骨密度検査、あるいは休暇者等が重なった場合は、人手が廻らなくなることがしばしばである。この10月から医療事故防止の観点から、開腹・開胸手術後、胃管挿入後の位置確認のためのエックス線写真をポータブル装置にて撮影する機会が多くなったために、出勤回数が増え重複する場合も多くなり、今まで以上に手が廻らない事態もでてきている。

出来る限り現状のスタッフでと言うことで、この4年間経過を見てきたが、業務内容も大きく変わるなど大変厳しい状況となっており、次年度に向けて増員を要請していきたい。

2)今後の課題

平成14年9月1日より放射線科へのオーダーリングがスタートしたが、現行のシステムで部分的には良い点が見られるが、科全体として見ると業務量の増加に繋がっている。これからはこのシステムを活かすべくRIS(放射線科情報システム)の導入を図り、HIS(病院情報システム)と接続をしてネットワーク化していくことがベストであると考えている。今後病院の電子カルテ化を進めて行く中で、RISあるいはPACSは必要不可欠なシステムであり、HISとのネットワークを構築しながら病院としても早急な取り組みが必要であると思われる。

また医療を取り巻く社会環境が大きく変わってきている。特に情報公開が言われるようになって、一般の地域住民をはじめ患者さん方からの指摘、質問、要望等が多くなってきた。我々技師が行う検査では患者さんに直接触れなければ出来ない仕事であり、放射線を人体に照射することが業務であるので、しっかりとした職業意識を持ち、接遇に注意を払いながら業務を進めて行かなければならないと考えている。放射線科としては、病院の基本理念に基づき“撮影に際しての行動マニュアル”14項目を作成している。各撮影室前の見やすい箇所に掲示をしながら日常業務の中で実践しているところである。これからは職場全員の意識、技術のレベル向上を図りながらより良い放射線科情報を提供していきたいと考えている。